十年後の甦りに

小川正夫評論集『性とアナキズム』

大沢正道

小川正夫は早過ぎた論客である。

彼の死の十年後に、数人の同志、友人の献身で刊行されたこの評論集を読んでまず受ける感銘は、ちょうどビールを勢いよく注ぐと白い泡がグラスのふちから零れるように、表現された文章に盛り切れない思想の沸々とした発酵である。思想がそれにふさわしい表現を得られず、時に焦立ち、時にジャンプし、でんぐり返る風情である。

それは、小川が戦後になってはじめて発表の自由を得、その時、すでに齡五十を越していたこと、なにか関係があるにちがいない。しかし、巻末に添えられた略年譜をみると、思想の沸々とした発酵は、敗戦直後というよりも、一九五〇年代に入ってからのものである。

一九五〇年代といえば、戦後のアナキズム運動が下降の一途を辿

取ったのである。この本に収められた論文や論評を読めば、小川の抱懐していたアナキズムが、いわゆる「オールド諸君」のオールソッドックスなアナキズムとも、またいわゆるヤングの、マルクス主義からの撰取も辞さないネオ・アナキズムとも、異質であることが理解されよう。

彼の内に沸々と発酵した思想は、非常に孤独であった。周囲とのコミュニケーションは断たれていた。小川の文章にみられるいさゝかペダンチックな、いさゝかエクセントリックな言い回しは、コミュニケーションを断たれたことへの報復であったかもしれない。

戦前からの豊かな知的蓄積——それは戦前、労農図書館や農民文庫などを開設した業績からも推定できる。端的にいつて彼は本好きだったのである——が、新しい契機をつかんで見事に開花しようとしながら、なお時季を得られぬまま、咲き急ぎせざるを得なかった——はくが小川を「早過ぎた論客」と呼んだのは、こういう印象を強く受けているからである。

そこには二重の悲劇が語られている。一つは、戦前、言論の自由を失った状況のなかで、豊かな知的蓄積は吐け口を見出せぬまま、鬱屈をよぎなくされた悲劇。第二は、戦後、言論の自由を得た状況のなかで、発酵した思想は十分なコミュニケーションを得られぬまま、成熟する機会を逸した悲劇。もともとそれは、なにか時代の先を感じ取り、読み取ることのできた先駆的な思想家が、だれしも甘受しなくてはならぬ運命なのかもしれない。

その意味で、彼の死後十年目に漸く刊行されたこの本が八遺稿・追悼集Ⅴとしてでなく、八小川正夫評論集Ⅴとして編集されたことは、まことに彼を知るものといわなくてはならない。これはおそら

り、「日本ではアナキストは雨夜の星であり、組織はなく、新聞や出版物がほとんどない現状」(「八組織Ⅴの問題を何処へ連れて行くべきか」)であった。一九五四年に開催されたアナキスト連盟大会について書かれた「組織か人間か——連盟大会での感想——」は、当時の状況とそなで苦悩していた小川の姿を如実に語っている。

「……僕は直ぐ発言しようとしたが、果てしもない論争に持ち込むことをおそれた。会議を割ってもしようがないという老婆心が発言をひかえさせた。この時ほど僕は自分の精神的怯懦に愛想がきたことはなかった。僕は椅子の席に変わってぼんやり海を眺めることにした。」

僕は一人で考えていた。アナキズムは搾取され、迫害され、つまはじきされ、踏まれ、けられた、生きて血の通った具体的な個人々の自由な人間像を、所謂組織論と如何に調和せしむべきかを発見し、創造せんとする古今独歩の最も革命的な自由な哲学である。これは単なる人間像でもなければ組織論でもない。と同時に、これは断じて単なる一科学的な社会理論でなく、この社会理論を抱擁する唯一の政治哲学でもある。人類の未来は一つにこの哲学の実践度にかかっていると……。

その夜、会議も終って、すっかり落ちついた気分になったオールド諸君が、まるで廿歳代の青年にでも化身したかの如く盛んに昔ばなしに花を咲かせた。

若い諸君には気の毒であった。重い夜の空には星はなかった。「小川の沸々とした思想の発酵は、おそらく一九五〇年代のしょぼくれたアナキズム運動の状況を一つの契機としているにちがいない。彼の詩人的な感性は、閉塞した状況のなかで、二十年先を感じ

く怪我の功名であろうが、十年目に刊行されたこと自体、時宜に適ったということができよう。もしこれが彼の死の直後に出版されたら、たとえ八小川正夫評論集Ⅴとして編集されても、なおかなりのディスコミュニケーションに悩まなければならなかっただろう。

しかし、いまは違う。政治理論、社会理論に限定せず、一つの哲学として、文化の問題としてアナキズムをとらえ返す思想は、徐々に深まりをみせている。この本のうちに、時代の先取りを読むことのできる読者が、もとより少数ではあるが、あちこちに散在しているはずである。書き手と読み手との相互の交響が可能ならずである。もはや書き手は故人となったが、それでも心ある読み手が書き手の心を感じ取り、自らの心にそれを移し変えていくことができるなら、十年の後の甦りもまた夢ではない。

この本は、そういう生命を内に秘めている。急ぎ咲きで散った花を、見事に開かせる仕事は、生き残ったわれわれの役割である。

「最後に僕は諸君にすすめたい。如何なる失敗にもめげない無分別、永遠に愛情が持つ無分別を……、何故ならば恋人アナキズムは今や祭儀を求むること切なるものがあるからです」と、小川は一九五三年に書いている。

(小川正夫評論集刊行会刊——名古屋市昭和区小坂町二一六

——送料とも六百円)

船の思想(2)

菅田正昭

4

ふたたび楠について。薫の強い刺激性の匂を発散させる楠は、その樹液を蒸留させて樟脳を作ることができる。ために刳舟の材質としては、防虫ということからもこれほど適した木材はなかった。そして、もうひとつ刳舟の原材として秀れていることは、この木が大樹になりやすいことであった。これらのことについてはすでに簡単に述べておいたところではあるが、前回、楠のこの二つの性質がどういう意味を持っているのか、という点にはふれずじまいだった。

さて、虫がつきにくく、大樹になりやすい、という性質はそれ自体としてすでに神木としての十分な資格を備えている。いいかえれば、薫りの強い匂を発散させるその巨木には、諸々の自然の精霊が宿っているのである。わたしたちは、木々に宿る精霊をふつう木霊(木魂・木玉)と呼んでいるが、その木霊は人の形をとって出現すると、山彦となる。今日、山彦は天邪鬼のように零落した神となっ

ているが、それでもハイキングへ行くと姿こそお願しにならないけれども、コダマとなってハイカーに挨拶してくれる。それはともかくとして、こういう神木で刳舟を造るには、古代人としてはかなり内的(土俗信仰的)抵抗があった、とわたしにはおもえる。だから彼らは刳舟のみならず、このような神木で家を建てたりするときには、まず最初にその神木から木々の霊(キダマサマ)の魂を抜いておくのだ。そして、抜かれたキダマのために、彼らはキダマの宿るべき別の神木を用意する。これは蛇足になるけれども、恐らく原始の森(社)が比較的永く保存されてきたのは、南方熊楠をもちだすまでもなく、古代人が必要とする木以外の樹木をむやみやたらと伐採しなかったことによる。

わたしがここでキダマを持ち出したのは、船霊について述べておきたからである。つまり、キダマの宿っていた神木がただの木となり、船の材料となるとき、いいかえれば木造船が建造されるとき、蛻の殻となった船は航行の安全のためにも新たな神を迎える必要があるからである。そうした神としては金毘羅神社、住吉神

社、エビスサマなどの御札が好まれていたようだが、厳密な船霊神としてはそういった御札は船霊の依代とはならないのである。というわけで、わたしはここで、吾が八丈島文化圏の習俗(船霊信仰)を紹介したい。

八丈島、八丈小島(現在は無人島)、青ヶ島では、かつて船を建造するとき船大工が船霊様をこめた。和船では帆柱を立てる下あたり、発動機船ではエンジン室などに小さな穴をあけて、そこに船のタマシイを封じこめた。ところで問題となるのは、その際封じこめた御神体である。八丈三島では、船霊様の御神体として、実は、初潮をまだみぬ少女の髪を使うのである。そして新造船の船卸し(進水式)の際には、その髪を毛を提供してくれた少女を船の真中に乗せて祝うのである。残念なことに、青ヶ島では戦後このような習俗はすたれてしまったが、八丈島では今日でも古風の漁船主が大漁と航行の安全を祈願して新造船をつくる時には必ず船霊様を入れるそうである。

ところで、この髪を毛をくれる少女を船霊ササギ、オフナ様、船霊様などと呼ぶが、さてここで想起してもらいたいことは、琉球の(おみなりおすじ)のおもろである。つまり、八丈島文化圏における船霊信仰は、琉球や古代日本と同様に、姉妹(おなり神)の生御魂を基調としているのである。そして、この習俗はポリネシアの島島とも共通しているし、わたしには、欧米語で船を女性名詞で呼ぶことに関係ありそうにおもえる。

わたしが今までで紹介してきた船霊信仰は、直接的には古代人の刳舟にまつわる信仰ではなかったかも知れない。がしかし、わたしが船霊信仰と木霊信仰を結びつけて考察しようとしたのは、実は、

今日(すくなくとも昭和初期ごろ)でも和船の一部には伝統的刳舟主体・丸木舟造りの手法が残っていたからである。つまり、大木を刳ってつくるオモキ(船底板)を船材とする工法では、本来は、山にある大木の発見・伐採から船大工の仕事は開始するのである。いわば、この船大工は伊勢神宮の遷宮に奉仕する宮大工にも似た立場にあるのである。古神道や民間信仰の儀礼には古代人の共同幻想や共同体験によるところが大であるから、船を造る工程には立木の伐採から船おろしに至るまでの間に、こうした儀礼が工法としても存在していた、と考えることができよう。

5

播磨国風土記饒磨郡のくだりに興味深い記述がある。

「昔、大汝の命の子火明の命、心行甚強し。ここをもちて父神患ひたまひて、遁れ棄てむと欲ほしき。すなはち因達の神山に到り、その子を遣はして水を汲ましめ、未だ還らぬ以前に、すなはち発船して遁れ去りたまひき。ここに、火明の命、水を汲みて還り来て、船の発ちて去るを見る。すなはち大きに嗔怒り、よりに風波を起ててその船を追ひ迫めき。ここに父神の船、進み行くこと能はず、遂に打ち破られき。ゆえに、そは波丘、……沈石の落ちし処は、すなはち沈石の丘と号け」云々(小島櫻札校注『風土記』)。

ここでも船は水汲みと密接な繋りを持っているけれども、わたしがここで注目したいことは、すくなくともふたつある。まず第一に、父神たるオホナムチの船が風波にはまったく弱かった、という点である。これは刳舟の基本的な性格であり、と同時に刳舟の伝統を継ぐ、すくなくとも江戸期以前までの多くの和船の欠陥でもあっ

た。がしかし、この耐波性の悪い刳舟の伝統を造船技術の拙劣性の問題として、ひとくちにかたつけてしまうわけにもいかない。というのは、岩礁の多い日本の海では、船底のこのたしきさは、耐波性の弱さ、あるいはスピードの鈍重の克服、という造船技術の立運れを抑圧する条件を備えていたからである。そしてこのことは、あとで述べることにするが、船の変遷が港の変化にどのような影響を与えてきたか、ということにも関連してくるのである。

さて、わが刳舟はこのように構造的にも海洋（とくに外洋）の航行には不向きではあったけれども、我々の祖先たちはこの欠陥をどのように克服しようとしたか。彼らは波から刳舟を防備するために舷側に柵をつけて耐航性を増したり、あるいはもつと原始的な方法としては軸先を高くするために後部に重心を集中させるなどした。ところで、この舷（柵）の出現は、原始的ではあるけれども、構造船への第一歩でもあった。その時代は、鉄器のかなり普及してきた弥生後期のことと想像されるが、この鉄器の普及で刳舟も単棧から複棧へ、と変化してきたのである。がしかしこの変遷は、《枯野》のような舟を最早一本の単棧から造れなくなった、という証左でもある。がしかし、この造船技術上の変化も、船底が固くしかも平坦である、という刳舟の伝統を打破するまでに至らなかったために、同時代の中国船と比較すると、極端に耐波性が弱く、これがために鈍重であった。したがって、オホナムチの船が単棧による刳舟であったか、複棧製刳舟であったか、はともかくとして、当時の船は小さいな風波によっても簡単に打ち破られたのである。

ところで、播磨国風土記筋磨郡の記述の中で、つぎに私が注目しているのは、「……」の箇所である。小島氏はその訳註において「こ

このはなしは、わたしの《船の思想》にとつては、実に典型的である。赤い衣を着た女神とは、渡海神としての船霊様である、そして、この神止山こそ《船丘》に他ならないのである。いいかえれば、彼らの共同幻想は船丘がいったい何んの喩であったか、をわたしたちに物語っているのである。

つまり、『風土記』の中の島や《船丘》は、風波や霧などのような航行中の非常事態の下に、人びとの危機突破の祈願をこめたところの、共同幻想として出現・形成されたに相違ないのである。そして、こうした霊威ある船丘や島はやがて船人たちの信仰の対象に転位していくのである。

さて、こうした信仰の対象としての《船丘》の原形は、では、なんでしょうか。やや結論的に云えば、私見では、《船丘》とは、航行中の船が沖から方向を確認するために眺めた岡や島だったのである。ところで、江戸時代までの航法をふつう《地廻り》というが、実は、これらの岡や島は《地廻り》の目印としての船丘だったのである。さて、地廻り航法とは、陸地を見ながら沿岸つたいに航行する、という原始的な航海術のことである。この航法だと、海図も羅針盤も不用であり、鎮国政策を採った徳川政権こそ民衆の自由な海上交通を阻害した時代においては、もつとも日常的な航法であった。しかし、この地廻り航法は同時に荒磯づたいの航法でもあるため、それなりの危険も多かった。四方を海で囲まれた《島国》ニッポンではあるのに、和船の造船技術が思いの外進展しなかったのは、主としてこういった理由による。日本という国家は、こうして江戸時代およびそれ以前も民衆の自由な海上交通を圧殺し、海上交通を為政者の個人的な利益として吸収してきたのである。

のあたりで脱文があるか。船丘があるべきである」と指摘している。わたしも、『風土記』の精神的文脈において氏の意見に同感である。では、船丘とはいったい何んであろうか。そのまえに、もうひとつ同種の記述をみておこう。

たとえば、肥前国風土記杵島郡のくだりに、「時に船歌の穴より冷水自らに出で。いはいはいはく、船泊てし処、自ら一つの島と成りき」というのがある。播磨国筋磨郡の場合は破船して船丘が形成されたのであるが、肥前国杵島郡のように船泊の地に船丘や島が形成されることも多いのである。ここには、島や丘の形成と船にかんする古代人の共同幻想的、神話作用的な認識が典型的に表出されていて誠に興味深いけれども、さて、これらの《島》や《船丘》はいったい何んの喩であつたのであろうか。

わたしはここでこの問題を解決するために——これは《島》や《船丘》の形成には直接にはむすびつかないけれども——八丈島の民間伝承を紹介したいとおもう。これは、八丈島は三根の神止山と神湊（浜）の地名説話と、末吉の郷に多い《沖山》姓の起源にかんする説話から成立している。そのはなしは近藤富蔵の『八丈実記』にもあるが、だいたいつぎのようである。

むかし（寛永十年＝一六三三）、八丈島に帰ろうとする船があつた。ところが、海上で濃霧に遭い、そのために数日間島影を見失なつてしまった。そのうち船中のひとりが八丈島の島影が見えるよう、神に祈願した。すると、赤い衣を着た女神が頭われ、山の上に立った。そのおかげで全員が無事磯に着くことができた。そしてそれ以降、その山を神止山、その磯を神湊とあがめ、その船の全乗員（十九名）が《沖山》と改姓した、という。

がしかし、海図も羅針盤もない古代においては、けだしもつと自由の《地廻り》があつた。この場合の《地廻り》とは、正確にいえば、わたしのいう《シマづたい》の航法である（大沢正道編『われらの内なる天皇制』の拙論「離島のなかの天皇制」を見よ）。わたしの考えでは、島や半島や岬や海への岡はすべて《シマ》ではあるが、古代においては、こうした《シマ》を航行の際の目印として交通したのである。むろん、刳舟の耐波性の弱さ、鈍重さなぞ困難はあつたけれども、人びとの勇氣はそれらを克服して海上の道・道の島を交通してきたのである。

6

船霊の神が女神の姿で出現されたり、船霊の依代として女性の髪の毛が好んで使用される、ということはずでにふれた。けれども、女性を船に乗せるのを嫌う、という風も実は案外に多いのである。なぜ女性の乗船を嫌うかといえば、海がイカルからである、そして嫌う根拠というのは、女性が穢れている、ということにつきる。いいかえれば、海がイカルのは、船霊の神の意に反して穢れた女性が船に乗ることがあるからである。では、もしそうであるならば、女神たる船霊神が、女性の乗船を拒むのは矛盾ではないか。がしかし、このことはすこしも論理的矛盾ではないのである。というのは、八丈島文化圏の実例で示したごとく、船霊の依代として提供される女性の髪の毛はまだ初潮を見ない少女のものだからである。つまり、この背景には、血の穢れが諸々の災厄を喚起する、という《伝統的な血の禁忌観》がある。もちろん、この伝統的な血の禁忌観というのは、古代共同体の貌が次第に国家の貌に転位していく過

程で精神の制度となっていくのだから、この伝説的な血の禁忌観」というヤツはあくまで括弧付のものであらねばならぬ。

では、船霊の依代としての女性の髪の毛の原初の提供者は、いったい誰れであったか。それには確たる証拠はないけれども、恐らくは族母としての少女（おなり）であつたらう。そしてこの少女とは、すくなくとも初潮を見たあと、忌小屋あるいは他火小屋、と呼ばれるような隔離された小屋の中で一定の成人の儀式を終了し、彼女の属する族の神々を祀ることのできたおなり神であつたに違いないのである。

にもかかわらず、わたしはやはり船霊神は女性の乗船を嫌った、とおもうのである。というのは、女性の乗船を船霊神が嫌う、という位相には女性と男性の職掌の相違が感じられるからである。つまり、この場合の船とは、交通の手段としての船と、漁船としての船のふたつの側面があるのである。いかえれば、男が危険な海に船出し漁をしているあいだ、族母としてのおなり神たちは男たちの安全を祈願していたに相違ないのだ。したがって、その禁忌を破って女性が乗船すれば、海がイカルのは当然である。

がしかし、その原初的意義が国家の出現で失なわれ、そして第二義的な意味での血の禁忌観もしいだいに薄らいでいくと、女性の労働力が漁業において活用される場合がある。その典型がカトトカカ船と呼ばれている、夫婦共稼ぎによる小さな漁船である。これは九州地方に多いらしく、時々青ヶ島にも出没する。たいていは、妻が船長で、夫は妻に船の航行の全権を委ね、漁のみにいそいでいる。このカトトカカ船は、恐らくは近代の産物ではあるけれども、ある意味では、この妻たちのありようはよほど船霊の原初

的位相になつたものといえよう。

ところで、青ヶ島では、女性ひとりだけで船に乗るな、といわれている。むろん、この場合は、女性ひとりだけで船に乗るな、ということではなく、女性が乗船する場合には必ず二人以上でなければならぬ、という意味である。これにはひとつの伝承があつて、むかしある女がひとり船に乗つたために、その船が渡海の途中荒波をかぶつて沈没し数名の犠牲者を出した、からだといわれている。渡海船の沈没を乗客たるかの女の責任に転嫁するのは誠に気の毒なことではあるけれども、青ヶ島ではこの民間伝承をもって女性ひとりだけの船旅をなからぬ嫌つてきたのである。では、緊急の所用でひとりだけで乗船しなければならぬ場合、どうするか。その際は、乗船しようとする女性は必ず人形を持参しなければならぬ、とされている。このことは、前記の民間伝承の論理的帰結ではあるけれども、わたしの推測では、恐らくはその人形が彼女自身の生御魂としての形見となつてに違いない。いかえれば、渡海の途中彼女の乗つた船が危機に遭遇するとき、彼女はその形見としての人形を海に投ずるのであらう。そしてそうすることによって、彼女は自分自身を含めた船びとの航行の安全を祈念するに相違ないのである。つまりは、青ヶ島のこの民間伝承——それが歴史的事実であろうと、なかろうと——の原型は、女性が乗船する際は、一人のときも二人のときも必ず彼女らは生御魂の依代としての人形を持参しなければならぬ、ということを示唆しているのである。いかえれば、ここにも船霊神としての妹の力がこめられているのである。

さてここで、わたしのいうカトトカカ船としてのシマの実例として、

胸形（宗像）の三女神が齋き祀られている沖ノ島について若干考察しておきたい。周知のごとく、沖ノ島とは朝鮮半島をめざす航路としての玄海灘に浮ぶ小島である。そしてこの島には、渡中（わたなか）の神としての胸形三女神がいらつしやるのである。胸形（わたなか）の神と「古事記」においては、アマテラスとスサノヲの誓約の過程で天の安の河でスサノヲの姫貴子として生まれている。すなわち吹き棄つる気吹の狭霧に成れる神として、多紀理毘売命（別名、奥津島比売命）、市寸島比売命（別名、狭依毘売命）、多岐都比売命の三女神は出現されている。

ところで、わたしがここで注目するのは、三女神の出現のありようである。つまり吹き棄つる気吹の狭霧に成れる」という点である。「古事記」の文脈においては、アマテラスがスサノヲの物実としての、彼の擗ける十拳剣を取つて三段に打ち折つて、かの天の真名井に振り濺ぎ、佐賀美邇加美て強く吐き出すと、胸形三女神が出現されるのである。たしかに、「古事記」の文脈においては、そうである。ところで、わたしの偉大なる敵たる西郷信綱氏は「古事記を読む（二）」「未来（一九七二年十一月号）」で、このことについてつぎのように述べている。「紀には田霧姫、また田心姫とある。「タ」は接頭語で、「気吹の狭霧」からまず成つたのであらうとされている。タコリはタキリから転じたのであらう。……私はタキリの「タ」は、紀にいう田心の「田」と見たい。……（そして氏はここで「田」の字のつく女神が山の神や水の神、すなわち農と緑深いことを簡単に指摘する）……とにかくタキリ姫の「タ」が「田」である見込みは相当あると思う。がしかし、これほど「古事記」の精神的文脈を無視した見解はない。もっとも恐らく氏はタキリヒ

メの齋き祀られている沖ノ島を経由して稲が朝鮮半島から到来したにちがいない、ということを指摘したかったのであらう。がしかし、わたしにいわせれば、タキリヒメの「タ」はやはり接頭語でしかなく、問題なのは「キリ」の方である。つまり、アマテラスがさかみに噛みて強く吐き出すからこそ吹き棄つる気吹」となつたのであり、そこに三女神が出現されたのである。わたしの想像では、吐き出した息が霧状になるということは、海霧の発生過程の喩である。つまり、この「古事記」のくだりは海の呼吸する様を彷彿とさせるのだ。荒波が沖ノ島にぶつかかり、そして前線なぞが通過するとき、島は濃いガスにすっかり覆われて見えなくなる。しかも玄海灘の瀬は速い。いつも海流は激しくタギッテイルのだ。そういうとき、とつぜん霧が晴れて、沖ノ島の島影が眼前にせまる。古代の船びとはきつと安堵の胸をなでおろしたにちがいない。そして人びとは水濁の胸形三女神の齋きおわす沖ノ島の貌をあらためて見るのである。いや、そうでなくとも、朝鮮半島をめざす航路としての玄海灘に浮ぶ小島カトトカカ船は十分に、まさしく、わたしのいうカトトカカ船としてのシマだつたのである。（つづく）

〔附記〕

沖ノ島について、わたしは胸形の三女神が齋き祀られている沖ノ島という表現を採つたが、むろん、これは正確ではない。というのは、沖ノ島（奥津宮）に鎮座しているのはタキリヒメだけであつて、イチキシマヒメ、タキツヒメの二神はそれぞれ宗像郡大島（中津宮）、田島（辺津宮）に坐す。そしてこれら三宮を併せたものが宗像神社である。

沖ノ島は玄海灘のほぼ真中に位置しているが、これら三島は朝鮮半島をめざすようにして一直線上に浮び、半島・大陸への「公道の島」を構成している。したがって、三島は文化の中継地としての重要な地位を占めると共に、当時の、とくに新羅などとの国際緊張関係をともに反映して、大和朝廷の尊崇も篤かった。とくに、沖ノ島は無人島にすぎぬものであったけれども、その地理的位置が半島・大陸への精神的前線基地として認識されるに至って、沖ノ島に坐すタキリヒメの神威は高くなり、そしてそれにもない宗像神社の神格も高くなっていった。沖ノ島が「秘儀の島」(益田勝美氏、『文学』一九七一年四、五、六月号)と呼ばれ、今もって古代祭祀の跡が神話さながらの状態で遺っているのは、この故由である。そして本来は国つ神であるはずの胸形三女神が皇室の祖先たちと同じウケヒで高天原で誕生している契機になっている。

がしかし、三女神の原初的な姿は、やはり「公道の島」における「船丘」としての神である。ところで、わたしのいう、「胸形三女神の齋き祀られている沖ノ島」という表現は正確に言えば、やはり間違いはあるが、大島・田島という二つの「船丘」を集約するものとして、そして三女神は三宮として一体でもあるので、あえてかような云い方を採ったので、読者諸兄姉におかれては誤解なきようお願いする。

直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかかわりたくないためと、小さな誌面を大事にしたためである。だから読者の購読料が『黒の手帖』の主要な収入源になる。読者が口伝で『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購読者となることをあえてお願いしたい。

購読料の払い込みは(振替東京一〇二四六五番)か現金封筒の利用が、一番安全である。切手で代用されてもよい。

◆『黒の手帖』取扱書店◆

東京Ⅱ文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、模索舎、かんだんむ、川崎Ⅱ甘露書房、名古屋Ⅱちぐさ正文館、京都Ⅱ三月書房、京都書院、ふたば書房、神戸Ⅱイカロス書房、札幌Ⅱアテネ書房。